

浙江工商大学主催の国際会議に参加して

見 城 悌 治 (千葉大学)

浙江工商大学主催の国際会議「浙江文化研究工程：清末浙江留日学生群体研究」で、筆者は会議の主題に合わせ、「近代浙江省の留日医学生」と題する報告をおこなった。扱った時期は「清末」に留まらず、1930年代半ばに及び、具体的には1935年に同仁会（日本の医学関係者や政治家がアジアへの医療支援を目的に、1902年に設立した団体）が発刊した『中華民国医事綜覧』所収の中国の医師・医学者名簿から、浙江省の出身者を抽出し、元留日医薬学生の特色を紹介する形を取った（参考：見城『『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留学歴—日本留学者を中心に』『千葉大学国際教養学研究』5号、2021年）。

この史料によれば、1935年段階で医療活動をしていた中国の医師4773名（物故者は除く）の中で、日本留学経験者は500名もいた（全体比1割）。そしてその中で1位は江蘇省出身の99名、浙江省出身者は96名で僅差の2位であった（ちなみに、欧米留学経験者275名のうちでは、浙江省出身者が52名で1位、江蘇は45名で2位だった）。

1912年には近代中国で最初の西洋式医学校と見なされる浙江医薬専門学校が誕生している。同校は、元留日学生たちが欧米のキリスト教系医学校に対応するため、地方政府等の支援を得て創設したとされ、中国の近代医学教育史で重要な位置を占めることになる。そして、1930年代に至るまで元留日学生が同校の教員の主体となり、たとえば千葉医専・医大出身者4～5名が校長に就いていた（参考：見城『戦前期 留日医薬学生の帰国後の活動と現代中国における評価』『国際教育』（千葉大学国際教育センター）3号、2010年）。

このように、浙江省出身の元留日医薬学生が地元に戻り、地域の医療活動や関連行政に関わったことは、日中交流史に大きな意味を持つと筆者は考えている。

しかしながら、これまでの留日中国人留学生研究史を顧みれば、辛亥革命などに繋がっていく政治や法律の学びに注目が集まり、自然科学系の修学をめぐる検討は十分とは言えない。すなわち、工業など諸産業の発展を支える科学のほか、感染症などに対応するための医学薬学の「近代的学知」の修得は、近代中国においても必須の課題であり、それらを担った人材の究明が着実に進展していくことは望まれるところであろう。

今回の会議では、筆者の雑駁な報告以外に、中国側から医学留学生の報告があったことは、心強いものがあつた。すなわち、朱虹氏の「近代中国留日女子医学生の習医、行医与伝医—以東京女子医学専門学校為中心（1908-1944）」が、それである。そこでは、東京女子医学専門学校を設立し、同校の教員に当たった吉岡弥生の留学生受入れ、また帰国後の元留日学生たちの多面的な活動と困難とが詳しく紹介された。朱氏の報告は、「元留日女子学生が〈近代医学〉をもたらしした」という観点に留まらず、女性の社会的役割などジェンダーの観点も有し、今日的な問題提起を多く盛り込んでいたことも特色的であつた。今後さらに研究が深化することへの期待は大きい。

さて、会議での諸報告についての詳細は、本特集の他の参加者の報告記に譲ることとし、ここでは浙

江工商大学による「浙江文化研究工程」について、筆者の感想を加えておきたい。

その一つは、会議冒頭で、呂順長先生が同プロジェクトのなかで、留学生史をめぐる膨大な史資料を、多数在籍する同大学の院生に割り振り、データ整理をさせていることに触れたことである。現代中国が（競争的資金案件とは言え）人文研究にも力を入れていることは側聞していたが、人文科学研究の分野、とりわけ基礎的な研究への支援が軽んじられつつある日本との人的物的な差異を改めて認識せざるを得なかった。

さらに感服したのは、日本の「候文体（くずし字）」を読解するためのテキスト（呂順長編著『日本近代文書解読入門』、浙江工商大学出版社、2020年）を作成し、院生に学習を徹底させていることを知ったことである。今回の会議で、海軍留日学生についての研究報告をした応蘇氏は、浙江工商大学と千葉大学の大学院ダブルディグリー生であった。応氏は、日本の外交史料館に残る手書きの外交史料を読みこなし、充実した修士論文を書き上げたのだが、そのくずし字読解能力は日本人院生に全く引けを取らないものであった。

それらが「浙江文化研究工程」によって培われたのだとすれば、今後もこうした能力を修得した中国の院生／若手研究者が、原史料（一次史料）を着実に読み込み、新たな研究の地平を切り拓いていくことは確実に思えた。

先にも触れたが、近年の日本は、人文科学研究について「社会にただちに貢献できる学問（極論すれば「儲かる」学問）であるべし」等の拙速な議論が一層強まっている。現代中国とは、諸々の体制が異なることは承知しているが、日本の研究の未来と照らし、〈不安〉の二文字が頭をかすめたことを告白せざるを得ない。

しかしそのことで「勝った／負けた」という愚かな嘆息を述べたい訳ではない。今回の会議のなかで、たとえば「ビックデータ」を取り入れた新たな研究の試みが中国側からなされたことが、日本側の関心と呼んだが、少なくとも日中関係史／留学生史研究であればこそ、それぞれの方法やデータを含む情報交換を積極化することによる相互研鑽が、ますます必要となることを実感したのである。